



令和3年1月28日
秋田大学

秋田大学の研究成果が米国科学雑誌「Annals of Surgery」オンライン版に掲載 我が国の後期高齢食道がん患者に対する手術治療成績

秋田大学大学院医学系研究科 本山悟教授、前田恵理准教授、飯島克則教授らのグループは国立がん研究センター 東尚弘部長との共同研究で、ビッグデータをもとに我が国の後期高齢食道がん患者に対する治療成績を検討し、75-79歳では手術が他の治療と比べて良好な予後をもたらすものの、80歳超では手術は化学放射線療法と同等であることを明らかにしました。本研究成果は日本時間2020年12月29日に米国の科学雑誌 Annals of Surgery にて発表されました。

食道がん手術は手術侵襲が大きいため後期高齢患者には身体にかかる負担が大きく、手術によって必ずしも良好な予後が得られるか明らかにされていなかった。そこで、2008-11年全国の院内がん登録データベースをもとに、後期高齢食道がん患者5,066例を対象に詳細に検討した。その結果、手術を受けた患者の割合は75-79歳群が34.6%、80歳超群は18.4%であり、80歳超群の患者では手術実施率が低かった。また、食道切除術を施行した患者の3年生存率は75-79歳群が51.1%、80歳超群39.0%と80歳超群で3年生存率が低かった ($P < 0.001$)。一方、化学放射線療法を受けた患者では両群間に3年生存率の差は認められなかった。多変量Cox比例ハザード解析の結果、臨床病期II-III期の患者に対して食道切除術を行った場合、75-79歳群では生存率が化学放射線療法より有意に良好であったが(調整後ハザード比0.731、95%CI 0.645-0.829、 $P < 0.001$)、80歳超群では化学放射線療法を受けた患者と同等であった。さらに、臨床病期III期の75-79歳群では術前治療および低侵襲手術(胸腔鏡手術あるいはロボット支援手術)を受けた患者の予後がさらに良好であった。

80歳超の多くの進行食道がん患者は全身状態不良により標準治療を受けることができないこともあり、手術が必ずしも他の治療と比較して良好な結果をもたらすとは言えない。一方、75-79歳患者では積極的に術前治療および低侵襲手術を行うことで予後が期待できる可能性がある。高齢化が進む我が国において、後期高齢がん患者が治療を選択する際の一指標になると思われる。

発表雑誌

雑誌名 : Annals of Surgery
論文題目 : Does Esophagectomy Provide a Survival Advantage to Patients Aged 80 Years or Older? Analyzing 5,066 Patients in the National Database of Hospital-Based Cancer Registries in Japan
著者 : Motoyama S*, Maeda E, Iijima K, Sato Y, Koizumi S, Wakita A, Nagaki Y, Fujita H, Yoneya T, Imai K, Terata K, Minamiya Y, Higashi T
(*corresponding author)
DOI : 10.1097/SLA.0000000000004437

【お問い合わせ先】

秋田大学 大学院医学系研究科
地域がん医療学講座 教授
本山 悟

電話 : 018-889-6439 / FAX : 018-836-2615

Email : motoyama@doc.med.akita-u.ac.jp